

しん いち
がんばれ真一

— 母と子のための童話 —

東出繁政



著者略歴

1934年 石川県に生まれる
玉川大学文学部教育学科卒業
北陸児童文学協会員 小松童話の会会員
石川県小松市立^{ろじよう}芦城中学校教諭
現住所 石川県小松市河田町ヲ 214

がんばれ真一——母と子のための童話 定価七〇〇円

昭和五十二年八月二十日 初版発行

著者 東出 繁政

発行者 石 澤 三 郎

発行所 株式会社 栄光出版社

〒一四〇 東京都品川区東品川一―三七―五

電話東京(四七二)二三三五(代)

振替 東京七一六二三五〇

印刷 江戸川印刷所
製本 田中製本印刷

がんばれ真一^{しん いち}
母と子のための童話

東 出 繁 政

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

がんばれ真一

目次

がんばれ真一	5
しんざえもん	21
秋祭りのころ	37
ねことうさぎの問答	53
太郎の家出	81
ばあさまと干柿 ^{ほしがき}	101

さし絵

橋本陽子

がんばれ真一

きこのうの放課後、六年一組の真一のクラスで、お金がなくなつた。千円という大金である。そして、真一がうたがわれていた。放課後、教室に残つて宿題をやっていたのは、真一だけだったからだ。

「みんな運動場にいたのに、真一君は、教室で宿題をやっていたのは、事実だろ」

クラス委員をしている時夫に言われたとき、真一は、すなおにそれを認めた。

「きみを、うたがうわけではないけれど……」と、前おきしながらも、真一のまわりを囲むようにして、みんながいつせいに、視線を真一にむけた。

真一は、体中がだんだん熱くなつて、きんちようすればするほど、汗がひたいから出た。

「ぼく……」

真一は、やっと、それだけ言つてから、前よりももつとはげしく、あぶら汗をかいだ。

いつも、こうであつた。つい二週間ほど前も、信之の運動帽がなくなつたとき、じぶんが少しも知らないのに、なんだか顔が赤くなつて、心臓がドキドキしてきた。そして、どつと汗が出てきたのだ。みんなが、じぶんをうたがっているのではないかと考えると、もう、顔じゅうが、火がついたように赤くなつて、ドキドキしてくるのである。

結局、運動帽は、信之が着がえのときに、体育館に置き忘れたのだと、わかつたのだが、そん

なときも、やっと、じぶんが犯人でなかったことが、証明できたのだと、真一は、肩の荷をおろしたように、ホッとして、よかったと思うのである。

母は、いつも、「とうちゃんはいないし、かあちゃんは、こうして病気で寝ているので、お金もなく、貧しい生活をしているが、そんなことをひげしてはいけない。じぶんの気持ちや考えを、はっきり言うべきときは、言わないと誤解されたり、うたがわれる」

と、言うのだが、そうたやすく、じぶんの気持ちを言えるくらいなら、いつも思うのである。その日は、お金をなくした史朗も、クラス委員の時夫も、真一だとはっきり言わなかったが、かといって、うたがいも晴れぬまま、みんな帰っていった。

真一は、ガランと静まりかえった教室の中で、ひとりになると、少しずつ緊張からほぐれて、汗がひいていくのを感じた。

やがて、じぶんの席を立て、窓の外を眺めた。空は、どんよりとして、今にも雨が降りそうである。なぜか、中庭のあじさいの青い花は、きょうは、特別に美しいように思う。

大きくふつくと咲いている花が、うらやましいとさえ思った。きつと、花は、だれにもえんりよせず、じぶんの好きなように咲いているのにちがいない。それが、とても真一には、うらやましかったのである。

それにつけても、家が貧しいにはちがいないのだが、どうして、はっきりと強く、じぶんの潔白を証明できないのだろうか、じぶんでじぶんを、どうしようもなく、みじめに思うのだが、どうにもできないのである。

ただ、一つだけ救いがあった。それは、クラスのみんなは、真一の家は貧しいが、お金などぬすむような子ではないと、認めているらしいことであつた。

だから、真一さえ、「決して、ぼくではない」と、せいせい堂々と言えはいいのだが、それができなかった。

つぎの日、お金が、史朗のかばんの中から出てきた。

「ぼくは、たしかに、きのうじぶんの持ち物を調べてみたが、なかったんだ。そして、きょうのお昼ごろ、かばんの中を見たら、いつのまにかあつたのだ」

と、史朗は言つた。

クラス委員の時夫が、きのう、史朗といっしょに調べたのだから、史朗の言うことに、まちがいはないのである。

すると、犯人がこわくなって、ぬすんだお金を、だまって史朗のかばんに入れたのだろうか。

……

それも、考えられることである。

しかし、本当は、真一が、大切にしていたじぶんのこづかいを、そつと、史朗のかばんに入れたのだつた。

真一は、じぶんが、うたがわれることが、いやだったのである。だから、こづかいの中から千円を、なくした史朗のかばんに、昼ごはんを食べると、すぐ、みんなが、教室にいない間に、入れたのである。

ところが、そのつぎの日、なくなったはずのお金が出てきた。担任の先生が、持ってきたのである。つい三日ほど前、体育館の廊下ろうかの前で、となりのクラスの者が拾ったのを、落とし物の係の先生に、とどけてあったのだという。

史朗が、千円札をズボンのポケットに入れていたので、着がえのとき、落としたのだらうと、先生は言った。

すると、史朗のかばんの中に入っていた千円は、だれのものなのか。クラス委員の時夫をはじめ、みんなキツネにでもばかされたように、ふしぎな顔をした。

史朗の母が、黙だまって入れたのだらうか。そんなはずがない。

千円は、大金である。普通ふつなら、いろいろ問いつめられて、その上にしかられて、今度こそなくさないように、持って行きなさいと……なるはずである。

すると、だれが史朗のかばんに、お金を入れたのだらう。

真一は、黙だまっていた。今こで言えは、逆に悪くとられるかもしれない。あいつは、貧しいから、ほしくなったのかもしれないと。

いいえ、それよりも、じぶんが犯人でなかったことが、はっきり証明されたのだから、そのほうが、千円なくしたことよりも、はるかにじぶんにとって、意味が大きいと思っていたのである。貧しいから、人のものを盗ぬすんだのかもしれないと、うたがわれていたことが、そうでないと、はっきりしたからである。

結局、拾った千円は、一時、担任の先生にあずけておくことになって、真一も、それでよかつ

たし、解決^{かいけつ}してホツとした。

うれしいときのくせで、真一は、学校の帰り、ずっと回り道をして、放牧場^{ほうぼくじょう}のある道を歩いた。

ゆるやかなみどりの傾斜^{けいしゃ}が、ずっと続いて、畜舎^{ちくしゃ}のまわりに、牛がゆっくりと草を食べている。

真一は、牛のすぐ前の、さくの前に腰をおろして、じっと、牛のようすを眺めるのが好きだった。真一より、ずっと大きいのだが、なんだか、弟のように、

「ほら、もっと、たくさん食べなよ」

と、心の中でつぶやいてみたりした。

ところが、それから四、五日した会計日に、また、史朗のお金が千円なくなつた。

「ぼくは、会計袋を見たとき、ちゃんと、千円札三枚と五百円札一枚の三千五百円あつたんだよ」

と、史朗は言う。

しかし、会計係の真一が、史朗の会計袋をあけてみたとき、二千五百円しか入っていなかったのである。

先生に念^{ねん}をおされて、真一は、もう一度全員のお金を数えてみたが、やはり、千円足りないのである。

でも、史朗の言うことも、まちがいではないようである。すると、千円はどこへ消えてしまっ

たのだろう。

「ほんとうに、ぼくの会計袋からお金を出すとき、二千五百円しかなかったの？」

史朗に言われて、真一は、

「たしかに、二千五百円しかなかったよ」

と言った。

そう言うってから、真一は、また、黙ってお金を数え始めた。顔が、火がついたように赤くなつていくのがわかった。

——ぼく、決してとらないよ——

と、心の中で言い続けていた。落ちつこうと思えば思うほど、汗がどんどん流れてくる。

「きみを、うたがうわけではないけれど、本当に、史朗君のお金が千円足りなかったのだね」

先生に、そう言われて、真一はうなずいた。

しかし、真一は、いたたまれなかった。みんなじぶんをうたがっているように思えて、体中が、燃えるように熱くなり、汗が、もう滝のように流れていった。なんだか、頭がガンガンと鳴っているようで、まわりのみんなが、よくわからなかった。

そのときだった。真一は、思わず、

「ぼくではないんだ!!」

と、叫び、声をあげて泣き出した。

机に伏せて、顔をうずめて泣いた。とにかく、どうしていいのか、ただ真一には、そうするよ



りしかたがなかったのである。決して、わざと泣くことで、ごまかしたのではなかった。

「きょうは、もういいから、帰りなさい。明日、また話し合うことにしよう。」

しかし、きみを、みんながうたがっていないことだけは、わからなければいけないよ」

真一は、どのようにして、家に帰ったかを、はっきりおぼえていない。ただ、家に着いたとき、まだ、ほほに涙が残っていたので、あわてて右手でぬぐったことを、知っていた。

史朗の会計袋には、たしかに、二千五百円しか入っていないかった。しかし、史朗は、三千五百円入っていたと言う。

真一は、日ごろ母の口ぐせになっていることばを、思い出した。

——いくら、家が貧しくても、ひげしてはいけない。じぶんの気持ちや考えを、はっきり言わないと、誤解されることがある。男だから、は

つきりした態度をとることだ――

なぜ、会計係なんか選ばれたのだろう。あのとき、「ぼくは、いやです」と言えば、もっとほかの係になったかもしれない。それを今、真一は悔んでいた。

きのう、先生が、史朗にも、もう一度家に帰って、よく調べてくるように言って、一応、その場はおさまったのだが、真一は、じぶんがうたがわれていることは、たしかなのだと、暗い気持ちのまま、きょうの朝をむかえたのである。

母の病気は、だんだんよくなっていると、きのう、医者（しんきつ）が診察（しんさつ）に来て、話してくれた。

真一は、うれしかった。生活保護（ほご）を受けているのだが、それだけでは、二人が暮らしていくのに、お金が足りないことは、真一にもよくわかっていた。だから、一日も早く、母が元気になって働いてほしいと願（ねが）っていた。

「かあさん、ぼく、読みたい本があるんだけど、千円もらえない？」

朝、学校へ出がけに、母に声をかけてみた。

「どうしても読みたいのなら、出してあげるが、かあさんが働けるようになってからではだめかい」

「先生も、今、読んだほうがいいと言うから」

真一の言っていることは、みんなであらめだった。本当は、史朗の足りない分千円を、じぶんが出しておこうと、考えていたのである。じぶんが、うたがわれていることが、たまらなかったからだ。

母は、寢床から起きて、まくらもとの黒いサイフの中から、千円出して、真一の手に渡しにくれた。

苦しい母の心の底を思うと、黙って千円札を一枚渡されたとき、真一は、なんとも言えないほど悲しい気持ちがかみあげてきて、心の中で、いっしょうけんめい母にわびていた。

——はやく、中学校を卒業して働き、かあさんにお金を返さなければ……——

真一は、そう思った。

そのまま学校に急ぎ、教室にカバンを置くと、真一は、すぐ職員室に行った。母からもらった千円を、先生に渡すためである。

先生は、いっしょうけんめいに、書きものをしていた。

「きのう、帰ってもう一度会計袋を、ていねいに調べてみたら、史朗君の袋の中に千円入っていました。よく調べなくてすみませんでした」

真一は、そういって一礼し、わびてから、上着のポケットから、千円札を取り出し、先生の机の上に置いた。

先生は、しばらく、じっとその千円札をながめていたが、ゆっくりとたばこに火をつけてから、一口吸うと、フーッと、煙を細くゆっくりとはき出した。

「本当に、史朗君の会計袋の中にあつたのかね」

「ハイ、まちがいありません」

「では、きのう、きみがよくたしかめなかったと、言うのだね」